
親友

石ころ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

親友

【Nコード】

N2846B

【作者名】

石ころ

【あらすじ】

家を出て、独りで安アパートに住む青年。そこに大学時代の友人が訪れる。

「よう」

インターホンを鳴らされたので、玄関に行きドアを開けてみると、そこには昔の友人である松永がいた。

「えっと……久しぶり」

なんと言えばよいのか分からなかったので、とりあえず当たり障りのない返事をした。その次の言葉を考えていると、

「失礼するぜ」

それだけ言つて、彼ははずかずかと我が家に入り込んできた。

「おい……」

俺の制止の声も聞かず、侵入者は玄関で靴を脱ぐと、四畳半の狭い室内に足を踏み入れた。俺は困惑していると、「いやあ、なんとも貧乏くさい部屋だ」と松永は感慨深げに腕組みをして言った。俺は怒るというよりも呆れて、ため息を一つつくと迷惑そうな声で訊いた。

「いきなりなんの用だ？」

「ああ」と、そこで忘れていたかのように松永は言った。「今、一文なしなんだ。晩飯おごってくれよ」

「帰れ」

「おいおい、つれねえな。親友だろ？」

「二年も会つてなかったのに、今いきなり親友だろと言つて頼りにくるな」

「よし、じゃあ今からまた親友になろうぜ！」

風を切る音だけが聞こえた。

俺のストレートを、松永は上体をひねって難なくかわしたのだ。

「なんだ、鈍つてなかったか」

俺がにやつと笑うと、やつも同じ表情をする。

「だから親友だと言つたろ？」

俺と松永は、大学を出てから急速に会う回数が減った。家は近かったが、二人とも働くようになって一年もすると、完全に関係が途絶えた。俺はその時から、もう会わないだろうな、と思っていた。そのはずなのに、こいつはそれから二年も経ってから、俺の家を訪ねてきた。いや、訪問というよりも無理やりの侵入だったけど。久しぶりの再会で、俺はちょっと郷愁というやつに駆られて、仕事はどうだ、女はできたか、などいろいろと話をしたくなったのだが、とりあえず一番気になっていいることを最初に訊くことにした。「で、なんで金がないんだ？俺と同じようなところに住んでいるくせに、給料もらってたらむしろ余裕あんだろ」

「競馬ですったから」

俺は渾身の右フックを松永に放った。それをやつは咄嗟に左手で受ける。がしっ、とコブシを掴まれた。

甘いな、俺は薄い笑みを浮かべた。松永が驚愕の顔をして――崩れ落ちた。俺がフックから一刹那だけ遅れさせて繰り出した左足のローキックを、もろに受けたからだ。俺は松永の腹の上に乗りがかった。これで俺の勝利は確定した。

さっと、コブシを振り上げる。

「ま、待った！待ってくれ、吉川くん！」

「なんだ？今更、命乞いか？」

「あれはジョークだよ。ジョーク」

「……………」

俺は疑いの視線を送りつつも、松永から離れた。彼は「ふう……………」と立ち上がると、苦笑を浮かべながら言った。

「いや実はな、仕事を辞めたんだ」

「……………はあ？」

「一週間前にな」

それで金が尽きて、俺のところへやってきたのか。彼がここに来たことに納得しかけたが、俺はそもその疑問を口にした。

「というか、なんで辞めたんだ？」

「それがな、いきなりお偉方に呼び出されたかと思うと、君は明日から来なくていいよって言われてな。まいった、まいった」

「それは世間一般ではクビと言う」

「そうなのか！？ 知らなかった……」

松永は「初耳だ」と言わんばかりに驚いてみせた。呆れを通り越して、尊敬してしまうほどポジティブな野郎だ。どうやら昔と変わっていないようだ。

それにしても、なにやらかしたんだこいつは……。

「まあそんなわけで、なにかおごってくれよ」

と言つて、まるで自分が家の主であるかのようにあぐらをかいて、ちゃぶ台の前に座った。殴り殺してやろうかこいつは、と殺意が一瞬芽生えた。

「……まったく」俺はやれやれと首を振った。「カップラーメンぐらいならいいが」

「カ、カップラーメン！？ 白いご飯と焼き魚と味噌汁じゃないのか！？」

「さあ、ベランダから飛び降りてお帰りください」

俺が松永をベランダへ押しやると、「カップラーメンでいいです、吉川さん」とおとなしくなった。よし、それでいい。俺は満足気な笑みを浮かべた。

「お前、親とは？」

俺がカップラーメンにお湯を淹れていると、ふと松永が訊いた。

俺はカップの内側の線まで淹れると、ポットをとめてフタをした。

もう一つのカップラーメンも同じようにしながら、俺は松永の問いに答えた。

「……会ってないな」

「——会えるときに、会つとけよ」

一瞬、松永が寂しそうな顔をした——が、すぐにスマイルに戻る。彼がそんなことを言う理由を、俺は知っている。

松永には、親がいない。

彼は小さいころ、両親が離婚した。そして引き取られた、母親に父親がいなくても、いや、いなかったからこそ、彼はしっかりと成長した。母親の苦勞を知っていたのだ。

「俺はいつか、でっかくなつて母さんを楽しませてやるんだ」

そんなことを、かつて言っていた。だが、その夢は叶わなかった。でっかくなれなかった、からではない。母親が、交通事故で亡くなつてしまったからだ。

大学を卒業する前だった。

労しかった。そうとう辛いはずだったろう。しかし、彼は最初こそ落ち込んでいたが、すぐにいつも通りの明るさを取り戻していた。

「きっと俺がしょぼくれている姿なんて、見たくないだろうから」
そう彼は言っていた。

だからこそだ。だからこそ、松永は俺に言っている。

わかつてはいるのだ、それは。

だけれども、俺はどうしてもそういう気にはなれなかった。

大丈夫さ、そんなことは簡単に起こらない——心の奥底で、そんな思いが残っているからだろう。それに加え、俺は親父と仲が悪かった。家業を継がなかった俺を、親父は「不肖者めッ！」と罵った。俺は「選ぶ権利は俺にもある！」と家を飛び出した。

——俺のこと、今頃どう思っているんだろうか。

「できたぞ」

俺はちゃぶ台に二つのカップラーメンを置き、松永と向かい合つて座った。二人で使うとなると少し狭いが、まあ我慢しよう。「おう、ありがとな！」と松永が清々しい笑顔を見せて、割り箸を割いてつまそくに食いはじめた。俺も彼に続いて、カップに手をつける。俺には家に遊びにくるような友達もいない。もちろん彼女なんかも。だから久しぶりの、誰かと一緒にの食事——と言ってもカップラーメンだが——となった。

不思議だった。

俺は安上がりなカップラーメンをよく食べる。まずいとは思わないが、うまいとも思わなかった。腹が満たせればそれでいい、そんなことを考えながら食っていた。

今日は、違った。

いつもと同じ種類のもののなのに、なにか特別な調味料を入れているわけでもないのに、なぜだかおいしく感じられた。馬鹿なことを話し合いながら、小さなちゃぶ台を二人で分けあって、笑顔で食べる食事は、とても美味だった。

「ごちそうさまでした」

松永が俺に軽く頭を下げる。

「どうするんだ、これから」

俺は親友を心配して訊いた。

「まずはバイトをして、それから新しい職探し、だな」

「そうか」

別にそんなつもりはなかったのに、

「また、やばいときは来るがいいさ。カップラーメンだがな」

そんな言葉が、口を衝いて出た。そして笑みを浮かべている自分に気が付いた。

「ああ、ありがとな」

彼は満面の笑顔を浮かべながら礼を言った。

俺は慌てて、付け加えた。

「ただし、金に余裕ができれば、なんかおこれ」

「そんなこつたるうと思っただぜ」

松永は笑顔を苦笑に変えた。俺は「出世払いというやつだ」と笑った。

「それじゃ、またな」

そう言つて、彼は我が家から去っていった。振り返りはしなかった。また会えるから、だからなのだろうか。

「ああ、またな……」

もう聞こえないだろうけれども、アパートを出てすでに道路にい

る親友に向かって、俺は呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2846b/>

親友

2010年10月8日15時11分発行